

・五センチと横断面が長楕円形を呈することが知られた。他の楕円筒形埴輪も相似た法量を示している。従来、他の古墳で出土している楕円筒形埴輪に比べて小振りであることが注意される。透かし孔には円系、方形系、三角形があり、17・22では突帯を挟んで上方に三角形、下方に円系もしくは方形系の透かし孔が認められる。円系の透かし孔には巴形のものが含まれている可能性がある。

一方、6・26は鱗状の製品である。楕円筒形埴輪に伴う鱗状の製品は大阪府柏原市松岳山古墳で報告されているが、本例も同様に復元できよう。ただし、6の上面の剝離痕の存在は、7と併せて、より複雑な形態を推測させる。15は楕円筒形埴輪の性格を考える場合、重要な位置を占めると思われるが、天地を明らかにしない現在、結論は保留しておきたい。

なお、今回、脆弱や小片等により図示しえなかった破片もあるため、新発見が得られた段階で再度報告することとしたい。

いずれにしても、渡土堤の基部に位置する第1トレンチの今回の出土品は、埴輪そのものの研究を進展させるとともに、渡土堤の性格等を解明する上で好資料と考えられよう。

(福尾正彦)

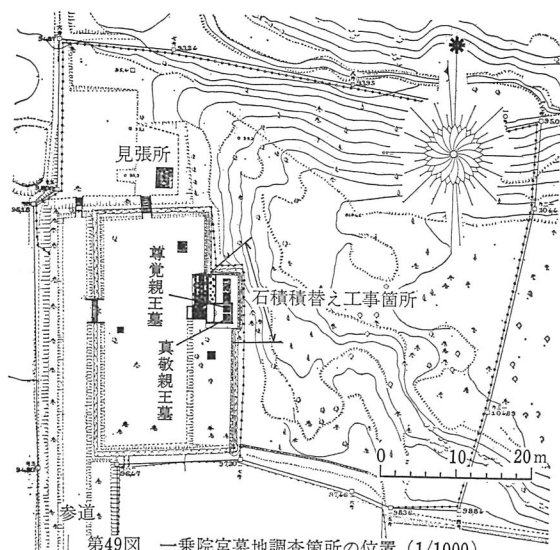
平成七年度 一乗院宮墓地石積積替え工事箇所の調査

奈良市雑司町に位置する一乗院宮墓地には後陽成天皇皇子尊寛親王と後水尾天皇皇子真敬親王の二基の五輪塔が所在する。該所は東大寺の旧境内であることもあり、周辺では布目瓦などが散見されるところである。

今回、墓地背面(東側部分)の石積が経年により傾き、一部で崩壊しているため、これを積替え、復旧するとともに、生垣の植栽を実施することとなった。施工期間は平成七年六月一日～七月二十日までで、掘削及び埋戻しの際に立ち会った(第49図)。

掘削箇所はⅠ.表土(厚さ約一〇センチ)、Ⅱ.灰色砂質土(厚さ約二〇センチ)、Ⅲ.礫混じりの黄色土(厚さ最大で一・二メートル)の層序を示していた。Ⅱ・Ⅲ層ともに締めりを欠き、瓦片や「享保二年」の銘のある墓石を含むことなどにより、裏込め土と見なしうるであろう。

遺物はⅢ層から瓦片八点のほか、石塔の破片も出土している。石塔片のうち、大きなものは石積み石材として、小振りの細片は裏込め石として使用されたものである。これらの中には欠損面を石積面に利用した前述の「享保二年」銘のある円頭方形の墓石や擬宝珠も認められた。工事は予定どおり施工し、これらの石材も積替えに際して、再用了。

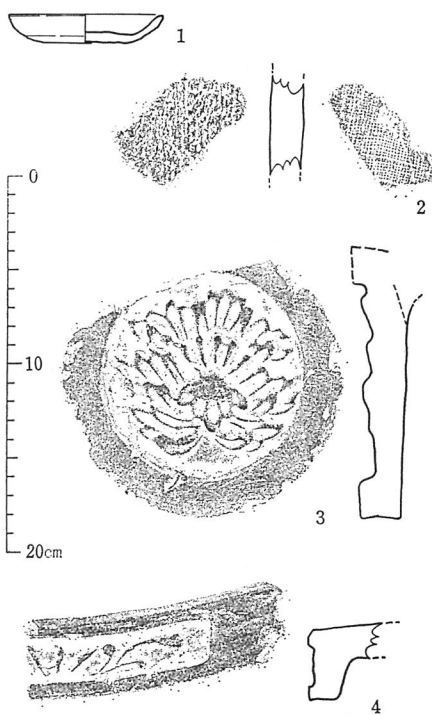


第49図 一乗院宮墓地調査箇所の位置 (1/1000)

遺物としては土師器片二点、瓦片六点を採集した。

土師器(第50図1) 二点出土しているが、本来は同一個体と考えられる。径八・二センチに復元できる皿である。底部の内面は不定方向のナデ、外面には指頭状の圧痕が認められる。

瓦(第50図2~4) 橙褐色を呈する布目瓦二点と黒灰色の燻瓦四点がある。布目瓦はいずれも小片であるが、平瓦(2)と丸瓦である。2では凹面に布目、凸面には縄蓆文らしき痕跡が認められる。燻瓦は軒丸瓦一点(3)、軒平・軒棧瓦二点(4)、丸瓦一点である。3は瓦当に菊



第50図 一乗院宮墓地の出土品 (1/4)

文を使用している。4はやや大振りの中心飾と繊細な唐草・子葉部分からなっている。

(福尾正彦)